

II-C-O-95

新しいモノクローナル抗体を用いた日本人乳癌、卵巣癌、大腸癌における癌抑制遺伝子 p53の発現の検討

今井俊介¹、芳賀敏実²、西野俊彦²、長野晃子²、山本浩司²、清塚康彦³

(奈良医大・2 病理¹、同・2 解剖²、久留米大・産婦人科³)

【目的】種々のヒト癌において癌抑制遺伝子の突然変異が関与していることが報告されている。今回我々は、日本人の3種類の癌における p53発現の有無を調べた。【材料及び方法】国立奈良病院外科及び、久留米大産婦人科において手術摘出された乳癌、大腸癌及び卵巣癌組織のホルマリン固定、パラフィン包埋切片について、新しく作製された p53に対するモノクローナル抗体(BP53-12:日本ターナ社)を用いて癌抑制遺伝子 p53の発現を免疫組織化学的に検討した。【結果】大腸癌では44%、乳癌では33%、卵巣癌では35%にその核内にp53の発現が認められた。各腫瘍の組織型について解析したところ大腸癌では中分化及び低分化型腺癌に、乳癌では硬癌、面疱癌に、また卵巣癌では漿液癌に高率に認められた。しかしこれら3種類の組織において良性腫瘍及び癌周囲の正常組織にはp53の発現は認められなかった。【考察】今回我々は病院検査室で日常行われているホルマリン固定、パラフィン包埋での試料についてp53の発現を調べた。各癌で30-40%と高率に検出され、反応も癌に特異的であり本抗体は非常にすぐれたものだと考えられる。

II-C-O-96

グリオーマにおけるGFAPを用いた染色性とFCMによる細胞周期の関係

加地泰広、今堀 巧、笠井治文、河本圭司

(関西医科大学・脳神経外科)

グリオーマの組織診にはglial fibrillary astroprotein (GFAP)がよく用いられているが、一定の方法によっても、細胞により染色性が異なっている。この違いは、細胞周期により生じるのではないかと考え、フローサイトメトリーを用いて、両者の関係を検索した。(方法)当教室で樹立したglioblastoma株のTC430を用いた。chamber slideで培養し、培養3~4日目に70%エタノール固定し、抗GFAPモノクローナル抗体を用いPAP法にて染色した。propidium iodide (PI) とFITC標識GFAP二重染色法を用い、Vero細胞、TC430、KMU100の株化細胞についてDNA量histogramより、G₀/G₁、S、G₂Mの細胞にgatingしGFAP陽性細胞の陽性率を算出した。

(結果)①Vero細胞はGFAP陰性であった。②TC430、KMU100では免疫染色で陽性であった。G₀/G₁、S、G₂M期のgating細胞とGFAP陽性率をみると、G₂M期の細胞に陽性率が最も高値を示した。

(結語)細胞周期によりGFAP染色性が異なることが示唆された。